

拉致家族ついに再会 / 流出個人情報の使われ方

2004.6.6
350円



発行所 読売新聞東京本社
〒100-8055 東京都千代田区千代田1-1-1
電話03(3242)1111

「ヨミウリサイター」

Yomiuri Weekly

再会ついに!

曽我さんのお話

流出個人情報の使われ方

2004.6.6

第3巻第23号通巻2921号
平成16年6月6日発行(毎週日曜発行)

編集長 川人敬一

発行所 読売新聞東京本社

東京本社 〒100-8055 東京都千代田区千代田1-1-1 電話03(3242)1111
大阪本社 〒530-8551 大阪市北区野崎町5-9 電話06(6361)1111
西部本社 〒810-8581 福岡市中央区赤坂1-16-5 電話092(715)4311

定価350円
本体333円



「差別か伝統か」

「千二百年の女人禁制」に議論沸騰

1300年の伝統か女性差別か。

「熊野三山」や「高野山」など「紀伊山地の霊場と参詣道」が来月、世界遺産に登録されることになった。だが、喜んでばかりはいられない。修験道の本山で「女人禁制」の奈良県大峯山が含まれているために、女性グループを中心に「女性差別」論議が沸き起こっているのだ。ジャーナリスト 栗野仁雄



「何でいまどき、女は駄目なのよ。反対側から登ったら、『一部の週刊誌にある解禁実現は間違いです』って張り紙があったわ。悔しい、あとちょっとで頂上なのに」

登山愛好家の女性グループが口々に不満を訴えた。奈良県天川村の大峯山。5月3日の「戸開き」を待ちわびたように登山客や修行者が各地から大型バスでやってきた。だが、登山口には「女人結界」と書かれた木製の門がある。女性はここまで。

大峯山は通称で「本名」は山上ヶ岳（かみのかみ）といい、標高は1719（たけ）。7世紀、役行者が開山したとされる霊山だ。宗派は問わないが、男なら誰でも頂上近くの大峯山寺を目指す。

登れば登るほど悟りの境地に近づくことされ、お参り7年で小先達と呼ばれて、袈裟・袴（はかま）が赦され、ほら貝も使えるようになる。12年で中先達、17年で大先達……。

署名を小泉首相に提出

その「男の山」が今年2月、大

きく揺らいだ。「大峰山女人禁制の開放を求める会」（源淳子共同代表）が約1万2000人の署名を集めて寺への陳情をはじめ、ユネスコや小泉首相にも申し入れをしたのだ。「女性が不浄だから」という理由なら差別ですわ」という福島瑞穂・社民党首や、タレントで和歌山県に住む、イデー・ハンソン氏も名を連ねる。

源代表が「海外からも女性の観光客が増える。時代錯誤の女人禁制では説明できない」と話すように、議論沸騰のきっかけは、大峯山を含む紀伊山地一帯が「世界遺産」に登録されることだ。源代表はいう。

「禁制は女性の人権を傷つけ、万人の平安を希求する宗教の趣旨にも反する。修行ではない男の人も登っており、宗教上の理由はずでに崩れている」

だが、前述した「先達」と呼ばれる人々には、そんな動きが苦々しい。大峯山の案内係を務める大西佐美雄さんは、

「宗教心もない一部の女性が騒いでいるだけ。大峯山は、押し付けではなく、土着の宗教と慣習をはぐくんできた。明治の宗教弾圧にも耐え、累々と繫いできた女人禁制を守ってこその大峯山です」

と言い残し、女人結界門を悠々とくぐって行った。

大峯山寺は「講」とか「組」な者といっても、登山に来る人は山

かどうかは、どこが決めるのだろうか。

「実力阻止しますよ」

「解禁すれば2、3年は珍しさで女性客も増えるでしょう。でも、これまで来てくれていた講の人たちは来なくなる。誰が補償してくれるんですか。大峯山は精神的にも生活的にも『寄って立つ山』なんです」というのだ。



正面に「女人結界」の大きな石柱。女性はここまで



女人禁制の大峯山の頂上にある大峯山寺(本社へりから)



「西の覗き」での修行。逆さに吊るされて絶叫するという

決着するのだろうか。

「解禁すれば2、3年は珍しさで女性客も増えるでしょう。でも、これまで来てくれていた講の人たちは来なくなる。誰が補償してくれるんですか。大峯山は精神的にも生活的にも『寄って立つ山』なんです」というのだ。

「お寺は講の寄付で運営されてきた。女人禁制を解けば、多くの講は『価値ないわ』と解散するでしょう。そうなればお寺は成り立たない。岸和田のだんじりも、大屋根に上れるのは男だけ。差別とは違いますよ」と語る。また、観光協会会長の紀埜弘道さんは、

大峯山の麓、洞川温泉の区長、柘谷源逸さんによると、大峯山寺と山を守っている五つの護持院、八つの有力な「講」、吉野山、洞川地区の総意で決めるという。すでに護持院は「1300年の伝統を守るべき」と女人禁制の存続を決めている。柘谷さんも、

「修行中は女性を見て起きる煩惱が妨げになる……は一般だが、解禁に反対する護持院のひとつ、龍泉寺の岡田悦雄住職は、「煩惱とは少し違います」と説明する。「修行では、断崖絶壁で怖がって大の男が泣いたりもします。山の神は女性で、泣いても赤ん坊のように母親の懷に抱かれる。成人した男が、女性や世間を意識せず感情を赤ん坊のようにさらけだせる唯一の場合なんですよ」

「西の覗き」と呼ばれる断崖絶壁では、命綱一本でさかさまになった修行者が「親孝行するか」「賭け事、女遊びはもうせんか」と問われて、「はい」と絶叫するのだという。確かに女性にはあまり見られたくない姿かもしれない。

「大峯山では、都合で禁制範囲が変わったり、酒を飲むことを許したりしており、すでに1300年の伝統の意味がない」と解禁を主張した。確かに禁制の範囲は、バスガイドの誘導しやすさなどのさまざまな理由で狭められてきた。役行者が「危ないので母上はここまで」と母親と別れたとされる「母公堂」も、今は禁制ではない。また、山を降りてくる男はビールの空き缶をぶら下げていて、「山に入れば誰もが修行の身」とは言えないのが現実だ。

登った回数によって装束も変わる(栗野仁雄撮影)



署名を小泉首相に提出

悠々とくぐって行った。大峯山寺は「講」とか「組」な

初めてではない解禁論

実は、解禁論議は今回が初めてではない。平成9年、女性信者が多い京都の聖護院が、

者といっても、登山に来る人は山を愛しているんです」と、一刃両断なのである。